

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	<p style="text-align: center;">須賀 真以子 【国際日本学専攻 平成17年度生】</p>	要 旨
論文題目	<p style="text-align: center;">中上健次の言語戦略 —「物語」における「空洞／うつほ」概念—</p>	<p>本論は、一九六〇年代から八〇年代にかけて活躍した中上健次について、その書記行為の目的と戦略について詳細に分析し、論じた大変意欲的な論考である。論の骨格となった研究は既に「昭和文学研究」などの権威ある学会誌に発表され、学会でも既に高い評価を受けているものである。中上は紀州新宮という大逆事件の舞台の被差別部落（「路地」）出身であり、その文学的な書記行為は、六〇年代以降に世界的に流行したポストモダニズム理論に基づき、支配/被支配を形作るイデオロギーを、言語や物語が内包する権力に置き換えてそれを脱構築することであった。中上の場合、それは「空洞／うつほ」の概念に集約される。これは本質（中心）を持たずに強力な磁力によって権力構造を反転させる場（物語る力）のことである。須賀氏は中上の評論や公開講座などの発言などから、この「うつほ」を三つの相にわけて論じた。第一は情報操作による決定不可能性の追究という語りにおける「うつほ」で、日本語という中央政府によって管理される言語で小説を書くことへの疑義を表明した各種テキストを分析した。第二に古典の『宇津保物語』の脱構築として書かれた中上の『宇津保物語』などから、被差別部落の「路地」を視座に、京都と熊野という中心と周縁のトポスを巡る反転と脱構築、「路地」の聖性化の戦略を分析した。第三点として故郷新宮の「路地」の解体以後の中上における「物語る」ことによる不決定性の試みを、複雑な語りの視点や語り手の恣意性、語る「私」の相対化などから分析し、中上の直面した困難を分析した。また、同時代に新しく登場した文学者にも同様の概念と書記行為が見られることを、中上と近い吉増剛造の作品群との比較によって、検証した。</p>
審査委員	<p style="text-align: center;">(主査) 教授 大塚常樹</p>	
	<p style="text-align: center;">准教授 谷口幸代</p>	
	<p style="text-align: center;">教授 高島元洋</p>	
	<p style="text-align: center;">教授 中村俊直</p>	
	<p style="text-align: center;">准教授 松岡智之</p>	